話す力・聞く力を育成する小学校授業の実施と評価

学籍番号　(159987)
氏　　名　(若木麻里子)
大学院主指導教員　(寺嶋浩介)

1. 目的

本教育実践研究の目的は、子どもの話す力・聞く力を育成することでコミュニケーション能力を高め、子どもが自分の思いを表現できるようになることであった。この目的を達成するために、小学校学習指導要領解説国語編における「話すこと・聞くこと」の領域に関する指導内容や先行研究を参考にして、子どもの発達段階に合わせて指導し実践研究した。「話すこと・聞くこと」の領域における活動の中核である国語科はもちろん他教科にも「話すこと・聞くこと」を活用し、授業を設計し、計 3 回にわたって実施した。

2. 授業実践と結果

小学校第 6 学年社会科「国力の充実をめざす日本と国際社会」【事例 1】及び、小学校第 3 学年国語科「気になる記号」【事例 2】、道徳「あいさつをすると」「うれしく思えた日から」【事例 3】の単元において、【事例 1】【事例 2】【事例 3】の順に、話す活動・聞く活動を取り入れた授業実践を実施した。

【事例 1】

第 6 学年社会科「国力の充実をめざす日本と国際社会」の単元において、「話す活動・聞く活動を取り入れた子ども参加型の授業実践」をテーマに授業実践した。国語科「話すこと」の領域で指導する「子どもが収集した知識や情報を考えたことや伝えたいことに関連付けることで、自分の立場を明確に説明したり、事実と感想、意見とを区別したり、概説したり、結論付けを明確にしたりして、事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫する」「必要な文言や数値などを引用したり、図解したり、重要語句の定義付けをしたりして、理由や事例を明確化する」活動を十分に取り入れた。その結果、データとしては不十分ではあるが、子どもが自ら調べ、思考し話した記録を残すことができた。

【事例 2】

第 3 学年国語科「気になる記号」の単元において、「書く活動から話す活動に繋げる授業実践」をテーマに授業実践した。国語科「書くこと」の領域と「話すこと」の領域を関連付けながら、「子どもが調べて分かった事柄や事実などの順序などに基づいて、自分の思いや願い、伝えたい中心を位置付けたり、相手に分かりやすく伝えられるように構成や内容を考え、道筋を立て

て話す」「子どもが目的意識、相手意識を持ち、場面や条件に応じて言葉の抑揚や強弱、間の取り方に注意しながら話す」活動を十分に取り入れた。筋道立った文章を作成発表させるために思考ツール、自己評価・他者評価を、発表する音声が適切か測るために子ども同士で行う自己評価・他者評価を活用した。その結果、子どもたちなりに工夫して話そうとする意識は、回を重ねる度に上昇した。子どもの伝えたいことの明確さは、思考ツールを用いた場合には回を重ねる度に上昇したが、思考ツールを用いない場合には下降した。一方で、子どもの話す速度や間の取り方、表情への注意は、音声の要点を学級全体で確認し発表させた場合には回を重ねる度に上昇したが、音声の要点を個人で確認させ発表させた場合には下降した。

【事例 3】

第 3 学年道徳「あいさつをすると」「うれしく思えた日から」の 2 つの資料を利用した単元において、「話す活動・聞く活動に重点を置いた子どもの自己表現のための授業実践」をテーマに授業実践した。国語科「話すこと」の領域で指導する活動は【事例 2】と同様の活動を、「聞くこと」の領域で指導する「話の中心に気を付けて聞き、自分の経験と結びつけたり、自分の考えと比較しながら聞く」「話している事柄の順序など話の組み立て方を意識しながら、話の要点を聞く」活動を、「話し合うこと」の領域で指導する「子どもが小グループ、学級全体で司会や提案などの役割を果たしながら、進行に沿って話し合う」「話の内容や話し方に関心を持って聞き、質問したり、自分の感想や意見を述べたりする」活動を十分に取り入れた。「話すこと」に関しては、概念・定義を比べたり、主張・根拠を繋げたり、既有知識を繋げたりするために思考ツールを、より相手に伝わりやすく発表させるために話し方・聞き方の要点の把握、音声練習を活用した。「聞くこと」に関しては、聞く活動と他の言語活動(話す活動)(書く活動)(読む活動)と連動させ、聞く力の伸長具合をデータとして残し評価するために視覚化、音声化、対面化を活用した。「話し合うこと」に関しては、話し合う視点を明確に話し合う活動を活発化させ、学習内容や子ども同士で思考を深めさせるために子どもの思考スキルを活用した。その結果、【事例 2】に引き続き、子どもの構成や内容及び言葉遣いに関する意識は回を重ね上昇した。子どもが自らの音声にも注意して話せたことが分かった。一方で、聞きながら書いたりするなど複数の活動を連動させることは子どもの発達段階によると難しいことが分かった。また、重要な視点から、話し合った内容について振り返ることができている子どもは多かった。

3. 成果と課題

【事例 1】【事例 2】【事例 3】から一貫して得られた成果は、「話すこと」に関して、思考ツールを活用することで、「子どもたちの思考を整理し筋道立った文章で話させることができた」ということ、「話し合うこと」に関して、思考スキルを活用することで、「話し合う視点を明確にし、子ども同士の話し合う活動を活発にさせ話し合う内容を深めさせることができた」ということである。課題は、「話すこと」に関して、「指導者が学級内全員の子どもの音声評価を行うことは厳しい」ということ、「聞くこと」に関して、聞く活動と他の言語活動と連動させながら活動させることは子どもの発達段階においては難しい」ということである。